

「こんなん」 しています。

わたしの「けん」

— 105 —

自然を狩る

「狩り」とは狩猟や潮干狩り、マツタケ狩り、紅葉狩り、ミカン狩りなど食糧調達に加え季節を愛でる行為でもあり、人間と自然との密接な関わりを思わせる語です。

「薬狩(くすりがり)」とは薬草採集のこと。『日本書記』に推古19年(611)、天皇が聖徳太子らを引き連れ大和の菟田(うだ)現在の宇陀市)で薬狩をしたと初めて記され、翌年は近隣の現在の高取町でも薬狩を行っていています。薬狩に狩の字を当てたのは薬効ある鹿の

角なども採取したことと関係がありそうです。

王権の狩場だったこれらの地域は薬になる動植物が豊富で、推古以来、薬作りの技術や大和の薬売りなど商いが発達し、有名な大手製薬会社が次々と設立されてきました。

現在の宇陀市では、薬草を生かしたまちづくりを進めています。特に女性の健康に有用な漢方薬となるトウキを中心に、休耕地への栽培、栽培技術開発と研修、6次産業化など地域ぐるみで取り組んでいます。また薬狩ゆかりの地に古民家を改装した薬草カフェをオーブ

くすりがり

ンし、尋ねてみました。薬草や地元野菜を生かしたメニューやお茶、デザートなど女性客にたいへん人気の様子でした。

薬草研究の里、和歌山

和歌山県は医療用薬草研究の土地です。世界初の全身麻酔手術を成功させた華岡青洲は旧那賀郡の外科医で、彼が開発した麻酔薬の原料「まんだらげ(チヨウセンアサガ



成実した薬草畑 (宇陀市)

ケシ採取(和歌山大学紀州経済史・文化史研究所蔵)

オ)は和歌山県立医大の校章にもなっています。

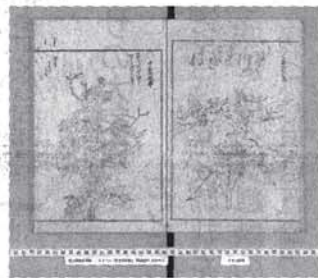
日高郡の旧川辺町には官営の薬用植物試験場が1939年から2012年まで開設されていました。途中で隣接する小学校の廃校を機に校舎を研究所とし、閉鎖後に訪れた際には校舎の面影が残る建物に「独立行政法人医薬基盤研究所薬用植物資源研究センター和歌山試験場」の看板が残されていました。

また、大正初期から戦後しばらくまで、和歌山県は医療用ケシの一大産地でした。ケシは痛みの緩和と医療に欠かせないモルヒネの原料のため、現在では国の厳しい管理下にあります。かつて日高郡から有田郡にかけての村々では盛んに栽培され、昭和初期の最盛期には大阪府と和歌山県で全国生産額の98%を

占めたと記録にあります。開花期の初夏には紀勢線の窓から一面に白く美しいケシの花畑が続くのが見えたというほど。農家の副業として貴重な生産物であり、力仕事ではないため女性や子どもの仕事で農繁期には学校が休業になる「ケシ休み」があったとのこと。

紀州の薬用植物としては、有田川町清水地区特産の山椒や紀の川流域の遺伝資源である紀州赤紫蘇などがあり、産地化に取り組んでいる紀の川市鞆地区の黒豆や日高川町の真妻わさび、豊富な果樹なども薬効が期待できそうです。地域資源の掘り起こしでは、単一企業の商品開発やピンポイントのブランド化で売り出そうとなりがちですが、地域ブランドは全国に過剰気味。ブランド化をするなら現物よりもむしろ地域の過

チヨウセンアサガオ(国会デジタルコレクション)



去を見ることです。

ある特定の空間に生まれた植物と人間との関係を歴史という長い時間軸をさかのぼることで再発見すること。そのことで乱発される地域ブランドにはない重厚な地域の物語が生まれるのではないのでしょうか。

推古天皇は女性初の天皇でした。先の薬草カフェで窓外に広がる万葉の野を眺め体に優しい料理をいただいていると、ふいに彼女が野に立ち現れるようで、薬草がつかなく1400年の歴史を身近に感じたのでした。

プロフィール



湯崎真梨子 (ゆざき まりこ)
和歌山大学産学連携・研究支援センター 教授
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。